

2011年5月16日

## 菱屋酒造店

## 津波乗り越えた「千両男山」5月に販売

宮古市唯一の酒蔵、菱屋酒造店（宮古市鉄ヶ崎下町5-24）は2階の床まで津波に浸かり、建物の木造部分や製造設備などすべて流されたが、貯蔵室で一部無事に残った清酒が見つかった。この清酒に復興を願う新ラベルを貼り、5月上旬からメールで受注し販売する。齋藤鐵郎専務（60）は「必ず酒造りを再開します」と話す。

## 「必ず酒造り再開する」齋藤専務語る

## (6) 津波が蔵を壊す

菱屋酒造店はペリー来航までの一季醸造。  
前年、嘉永5年（1852）創業。150年超守り続ける湧き水を利用し、の仕込みが終わるびん詰り続ける湧き水を利用して、の段階で、再雇用の方々が午後3時で帰った後は5時まで通常業務という感じだったという。大津波警報を元で愛飲されてきた。酒造台にある自宅に急いで戻ったところ、眼下の鉄ケ



高台にある自宅の庭で酒と齋藤専務

震災後しばらくは瓦礫の山で近づくこともできなかつたが、3月17になつて蔵に入ることができ、1階部分の貯蔵庫から1升瓶約200本、4合瓶約500本ほどが無事に残つてゐることがわかつた。運び出した清酒は、三浦勝子社長（82）の筆による従来のラベルに、復興を願うメールを加えた。

新ラベルで全国に販売する。「事務所のカラ一印刷機が流されてしまつた。しようがないので自宅のモノクロプリンターで刷り出したものを貼つて出荷することになりそうだ」と話す。瓦礫のなかでの活動となるため電話などの受注は難しく、メールを中心にして受け付け販売するとい



津波に耐えた社屋。壁にはかつての木造部分の屋根の跡が白く残る

このたびの酒  
震の全国へ

同社は地元向けの酒を醸す蔵として長年営業を続けてきたが、05年に著名な南杜氏の辻村勝俊氏を杜氏として招いてからは、市外・県外への販売増に力を入れていた。

辻村杜氏は酒造りに50年

以上携わり、90年頃からは青森の銘酒「田酒」を醸す西田酒造店の杜氏として田酒の評判を確立した。その仕立てた経歴を持つ人たる津波の際は波が来なかつた。だが、今回は6㍍の波を被り、昭和48年に増築したコンクリート建屋部分は2階の床上まで浸水、木造部分は20石（3600kg）の仕込みタンク20数本まで通常業務といふ感じだといふ。大津波警報を聞き、専務は蔵の近くの高台にある自宅に急いで戻つたところ、眼下の鉄ケ

崎の町が津波にのまれる様子が見えたという。昭和8年の三陸大津波の際には80歳の高さ、昭和35年のチリ津波の際は波が来なかつた。だが、今回は6㍍の波を被り、昭和48年に増築したコンクリート建屋部分は2階の床上まで浸水、木造部分は20石（3600kg）の仕込みタンク20数本まで通常業務といふ感じだといふ。大津波警報を聞き、専務は蔵の近くの高台にある自宅に急いで戻つたところ、眼下の鉄ケ

崎の町が津波にのまれる様子が見えたという。昭和8

年の三陸大津波の際には80歳の高さ、昭和35年のチリ津波の際は波が来なかつた。だが、今回は6㍍の波を被り、昭和48年に増築したコンクリート建屋部分は2階の床上まで浸水、木造部分は20石（3600kg）の仕込みタンク20数本まで通常業務といふ感じだといふ。大津波警報を聞き、専務は蔵の近くの高台にある自宅に急いで戻つたところ、眼下の鉄ケ

台にあり津波を被つておらず、震災直後の断水の際は被災者の飲み水としても使われた。酵母は辻村杜氏が持ち込んだ9号系の秘伝酵母で、県の技術センターで入手できるため、設備さえ整えば酒造りを再開できる。被災額や新たな設備の導入にかかる費用はまだ調査中で明らかになつていなが、今年の秋には酒造りを再開する予定で動いていくという。既に本社屋の横に残つた平屋の建物に手を入れており、仮設事務所として使う予定。前の大津波も乗り切つた。今度も必ず乗り越えられる」と話している。

品ラベルに辻村杜氏の顔写真を入れたり、「辻村勝俊氏との契約を結んでいた菅原富男氏との契約が切れた04年、菱屋酒造店では前の杜氏を交通事故で亡くしたため、以前に勤めていた菅原富男杜氏と契約を結んだ。それ以後、製品ラベルに辻村杜氏の顔写真を入れたり、「辻村勝俊氏との契約を結んでいた菅原富男杜氏と契約を結んだ。それ以後、製

津波を乗り越えた「千両男山」の注文問い合わせは、hsiya\_miyako@mbm.nifty.com。